

219-1953

日本組織培養学会

昭和61年9月30日

会員通信

第60号

発行責任者

許南浩(東大・医科研), 間中研一(独協医大)
常盤孝義(岡山大・医), 大島浩(大阪歯大)
山下三千年(長崎大・医)
栃木県下都賀郡壬生町北小林880 (〒321-02)
独協医科大学・組織培養研究室
電話(0282)86-1111 内線2203

§ 新旧合同幹事会議事録

日時: 昭和61年7月13日(日) 15:30~17:30

場所: 私学会館(東京)

出席者: 佐藤二郎, 高木良三郎, 奥村秀夫, 西義介, 沖垣達, 鈴木文男, 常盤孝義,
松村外志張, 黒田行昭, 難波正義, 梅田誠, 小野順子, 蔵本博行, 加治和彦,
乾直道, 許南浩, 渡辺正己, 間中研一, 宮崎正博

<報告・討議事項>

1) 旧編集幹事報告(沖垣, 鈴木, 常盤)

(i) 組織培養研究(鈴木)

春号(第1号): 大会要旨集を掲載した。第59回大会より一演題につき3頁までとし, 従来より1頁増加した。

秋号(第2号): 原則として春の大会のシンポジウム等の内容を総説形式で掲載することを廃止した。

秋号の掲載内容について以下の意見があった。

◎ワークショップ, シンポジウムを中心とした小集会(日本組織培養学会後援)の講演内容を掲載する。幹事は小集会開催に向けて積極的に努力する様にしたい。

◎Monographとして復活させる。

◎内容の充実したものを発行するに当っては, 編集幹事だけではその運営は困難である。

このためには拡大編集委員会を設立する必要がある。

◎本年度秋号に限っては, 今大会の外国人講演の内容を掲載する。

(ii) 会員通信(常盤)

◎59, 60年度で計7号発行した。

◎掲載内容: 学会案内, 関連学会案内, 印象記, ポストドク募集案内, 研究室だより, 歯学会案内(大島会員担当)等であった。このうち, 研究室だよりは好評であり, 特に企業から投稿希望が多いのが目立った。

今後更に内容を充実, 発展のために以下の意見があった。

◎新企画として各地の培養セミナーの案内を掲載する。

◎現在年3報発行しているが, これを年6報にする。

2) 旧国際担当幹事報告(高木)

◎アメリカ組織培養学会の現状について説明があった。

◎ IACC についての経過説明。

入会は学会単位で行う。会員数 350 名以上の学会は 3 名の代表を送ることができる。本学会代表として佐藤、高木、奥村の 3 氏に決定した。また代理に小野氏を決定した。代理者にも投票権はある。会費は 1 名につき 2 \$。第 2 回会合が本年 9 月 20～26 日に開催される。

◎ 今後は外国通信の出入の一本化を行う（国際担当幹事 ↔ 庶務幹事 ↔ 会長）。

3) 旧会計幹事報告（松村）

◎ 一般会計、事業会計、特別会計から成る 3 会計方式で 60 年度決算及び 61 年度予算案の説明がなされた。しかし、この方式では一般会計と事業会計の一部が重複するし、また理解しにくいとの意見があり、従来どおり一般会計と事業会計を一本化して一般及び特別会計から成る 2 会計方式で行うことに決定した。

その他次の様な問題提起があった。

◎ 広告収入は一般及び特別会計のいずれに入れるべきか？

◎ IACC 経費を計上していないが、どうするか？

4) 旧庶務幹事報告（奥村、西）

◎ 故吉田俊秀先生へ花輪（2 万円）をお供えた。学会規約に会員の慶弔の項を追加する必要がある。但し、対象は大会世話人経験者を原則とする。

◎ 会員名簿の整備を早急に行いたい。特に賛助会員の不備（連絡不能が数社ある）が目立つ。学会事務センターに現状調査を依頼する。

◎ 大会抄録誌の販売：学会事務センター販売価格と同じ値段（2,500 円）で学会参加の非会員に抄録誌を配布した。

◎ 入会退会：59、60 年度で計 85 名の入会があり、現在会員数は 600 余名となった。本年 3 月 31 日をもって高岡聡子会員が退会した。

◎ 学会として特許申請に必要な証明書（当該座長が書く）発行に協力している。証明書には発表内容を具体的に且つ正確に書くことが要求されている。

その他次の討議課題の提案があった。

◎ 第 2 回幹事会開催時期？

◎ 幹事事務引き継ぎの時期？

◎ 名誉会員の条件 大会世話人、70 才以上、著名な業績 etc. ?

5) 新旧幹事の事務の引き継ぎが行われた。

（蔵本博行、宮崎正博）

§ 第1回幹事会議事録

日時：昭和61年7月14日（月） 12:00～13:00, 18:00～18:50

場所：私学会館（東京）

出席者：佐藤二郎、奥村秀夫、高木良三郎、沖垣 達、梅田 誠、蔵本博行、乾 直道、
小野順子、加治和彦、松村外志張、許 南浩、宮崎正博

- 1) 会議に先立ち、佐藤会長より挨拶があった。
- 2) 佐藤会長より新幹事の役割分担の発表があった。（内容は総会議事録に掲載。）
- 3) 新入会員56名、賛助会員2社が承認された。
- 4) 総会スケジュールが決定された。
- 5) 昭和60年度決算：一般会計と特別会計の二会計方式で行うことが確認された。
- 6) 昭和61年度予算：一般会計と特別会計の二会計方式で行うことに決定された。
広告収入の取り扱いについてはいろいろ意見が出たが、特別会計へ入れることに決定した。
特別会計から一般会計への繰入れ科目を作り研究誌発行等の経費に充てることが決定した。
尚繰入金は広告、フィルム収益等で充てる。
特別会計の利用について外国人シンポジストの招待費等に充てては？との意見もあったが、
山根会員からの寄付金（500万円）の趣旨も考慮の上継続審議することになった。
- 7) 組織培養研究第2号の内容：61年度第2号に関しては、外国人講演（ワークショップ）の内容、
山根 續会員の特別講演内容、並びに山田正篤前会長の教授退官記念寄稿等を掲載することに決定した。
更に本年9月沖縄で開催されるシンポジウム（佐藤、高木、岡田先生講演）の見聞記（幹事会から1名派遣）、
及び本年12月で開催されるヒト細胞研究会シンポジウムの内容を掲載するか否かについては更に検討する。
今後研究誌第2号に何を掲載するかについていろいろ意見が出されたが、結局学会後援の小集会（シンポジウム、ワークショップ等）を開催してその内容を掲載することを基本路線として今後編集幹事を中心に更に検討し、幹事会でも継続審議することになった。
- 8) 物故会員：大会世話人経験者を対象に学会として弔意を表明する。その形式については幹事会に一任してもらうことを確認した。
- 9) 名誉会員：選考規定等について継続審議することになった。
- 10) 若手研究者への奨励賞の設立についても継続審議することになった。

（蔵本博行、宮崎正博）

§ 日本組織培養学会第59回大会 総会議事録

日 時：昭和61年7月15日（火）

場 所：私学会館（東京）

議 長：黒田行昭会員

日本組織培養学会第59回大会に際して、大会世話人 奥村秀夫会員の挨拶により定例総会が開催された。

開会に引き続き、物故会員 吉田俊秀名誉教授（国立遺伝研・細胞遺伝部、昭和61年7月7日午後0時55分御逝去）に黙禱を捧げご冥福を祈りました。

蔵本博行庶務幹事が議長に黒田会員を推薦し、これが承認された。以下黒田議長により議事進行が行われた。総会議事及び承認事項の概略は下記のとおりである。

1. 会長挨拶

議事に先立ち、佐藤二郎会長の挨拶があった。

2. 新幹事紹介

佐藤会長より新幹事の紹介があった。新幹事は以下のとおりであった。

庶務幹事	： 蔵本 博行（北里大・医）
"	： 宮崎 正博（岡山大・医）
編集幹事	： 加治 和彦（都老人研）
(研究誌担当)	： 渡辺 正己（金沢大・薬）
(会員通信担当)	： 許 南浩（東大・医科研）
()"	： 間中 研一（独協医大）
()"	： °常盤 孝義（岡山大・医）
()"	： °大島 浩（大阪歯大）
()"	： °山下三千年（長崎大・医）
会計幹事	： 乾 直道（日本たばこ産業）
"	： 松村外志張（東大・医科研）
国際担当幹事	： 小野 順子（大分医大）
"	： °高木良三郎（大分医大）
"	： °奥村 秀夫（国立予研）
会計監事	： 難波 正義（川崎医大）
"	： 小山 秀機（横浜市大・木原生物研）

以上。印は会長委嘱。

3. 新入会員紹介

蔵本庶務幹事より新入会員56名と賛助会員2社が前日の幹事会で承認されたとの報告があった。

4. 幹事報告

i) 庶務（奥村旧庶務幹事報告）

◎会長方針に基き新入会員の勧誘に努めた結果、現会員数が600余名となった。

◎第58回大会で新規企画されたワークショップを今大会でも取り入れ、ワークショップの定着化に努力した。

◎国際交流の場としての国際細胞培養会議（IACC）が本年秋頃に正式発足する予定である。

ii) 編集（沖垣旧編集幹事報告）

◎会員通信：59-60年度で計7回（53号-59号）発行した。

◎組織培養研究誌：59-60年度で計4号発行した。春号（1号）には大会抄録を掲載し、秋号（2号）には春の大会のワークショップの内容詳報、その他他学会参加印象記等を掲載した。また2号の内容については更に充実すべく今後とも継続審議する。

iii) 国際（高木国際委員報告）

本年6月4日より8日まで、ChicagoのMarriott Hotelで第37回アメリカ組織培養学会が開催された。6月7日午後0時15分より行われたbusiness meetingの議事を大略紹介する。

◎現会員数：2,292名

◎人事（選挙結果）：

会 長 Dr. George Martin (Univ. Brit. Columbia, Dept. of Path.)

次期会長 Dr. Robert E. Stevenson

副 会 長 Dr. Nellie Auersberg

庶務幹事 Dr. Warren I. Schaeffer

なお、Dr. Harry EagleとDr. Theodore Puckが名誉会員に推挙されました。

◎学会行事：

(i) Fourth Decennial Review - Cell and Tissue Culture International Conference

9月22-25日, 1986, Hershey Pa.

(ii) 次期学会 Washington D. C.

(iii) 次々期学会 Las Vegas

◎IACC (International Association for Cell Culture) : TCA (アメリカ)

の幹事会でTCAがIACCに加入する事が承認された。年会費、1人あたり\$ 2.00。

TCAの代表委員としてDr. McGarrity, Dr. Ham, Dr. Hoppsの3氏が決定した。

5. 昭和60年度決算

前日の幹事会で黒田、難波両会計監事より承認を得た昭和60年度決算について、松村会計幹事より一般会計と特別会計の2会計方式で説明があり、異議なく了承された（別項参照）。

6. 昭和61年度予算

乾会計幹事より上記2会計方式で昭和61年度予算(別項参照)について説明があり、活発な討議が行われた。以下に討議の概略を示す。

支出について：

◎支出の部で新規企画としてシンポジウム開催等とあるが、これは年2回の研究会を年1回の大会に変更した学会規約の趣旨に反するのではないか？

◎組織培養研究秋号(第2号)の内容をcreativeなものとして充実させるには何らかの手段を講じなければならない。この目的でシンポジウムやワークショップを開催してその講演内容を掲載するのが良いと思われるし、また学会の活性化にもつながる。またこのシンポジウムやワークショップは大会と性質を異にするので学会規約に反するものではない。

◎研究誌にcreativeなものを掲載するという目的のためだけにシンポジウムを開催する必要はないと思う。

◎2年前に学会規約が改正され、会長・幹事がすべて変って実行してきた期間、いろいろと不都合なことが起り、規約はそのままにしても運用面で補足する必要があると思われる。

◎研究誌秋号については、毎回思いつきの内容を掲載するのではなく、今後は毎年一定の形のもを掲載する様にしたい。

特別会計について：

◎特別会計として約1,000万円もの高額の繰越金その他収入がありますが、これまでどおりただ貯め増すだけなのですか？それとも何か利用計画がありますか？

◎現在、一部については一般会計へ繰入れ利用をすることを考えている。しかしただなしくずし的に一般会計へ繰入れるだけでなく、外国人シンポジスト招待等その他有効に利用する方法を検討中である。

◎約1,000万円のうち、500万円は山根 續会員からの寄付金であり、現在山根会員の趣旨を考慮しながら利用の仕方を検討中である。従って特別会計としてはこの500万円をはずして考えるべきである。この件に関しては後程会員通信にて報告する予定である。

7. その他下記のことが蔵本庶務幹事より報告された。

- i) IACC委員として佐藤、高木、奥村の3氏が決定した。
- ii) 今後物故会員(但し大会世話人経験者に限定)に学会として弔意を表する様にするが、その内容については幹事会に一任してほしい。
- iii) 名誉会員選考については、今後更に幹事会で審議を継続する。
- iv) 若手研究者への奨励賞設立が懸案となっている。早急に決定しなければならないが、重要課題であるので慎重に継続審議したい。

8. 次期大会(昭和62年度)

第60回大会は黒木登志夫教授(東大・医科研)のお世話で開催されることが決定された。黒木次期世話人より、来年度大会は一般演題を中心に行い、また第60回の記念大会にあたるので学会のあり方、遺伝子学や分子生物学等とのかかわり方等についても考えたいとの挨拶があった(次項参照)。

(蔵本博行、宮崎正博)

§ 日本組織培養学会第 60 回大会の予告

日本組織培養学会第60回大会をお世話することになりました。日時・場所は次の通りです。

日 時：昭和62年 6月29日（月）夜

6月30日（火）全日

7月 1日（火）全日

場 所：国民年金中央会館 こまばエミナース

東京都目黒区大橋 2丁目 19 - 5

（井の頭線で渋谷から 2 丁目駒場東大前駅、徒歩 5 分）

一般演題を重視したプログラム編成を考えています。会場が二ヶ所にとれますので全て演説にしたいと思っています。シンポジウム、ワークショップなどはまだ決めておりません。ご希望、ご意見がありましたらお聞かせ下さい。

詳しい案内は次号の会員通信でお知らせします。

第 60 回大会世話人 黒 木 登志夫
東京大学医科学研究所
TEL. 03-433-8111 内 255

§ 今秋シンポジウム開催に関するお知らせ

昭和61年度日本組織培養学会シンポジウムを企画致しました。多数のご参加を歓迎致します。

テーマ：血管内皮細胞 — その発生、障害、修復と増殖： *in vivo* および *in vitro* から —

日 時：昭和 61 年 11 月 15 日（土）

午前 9:30 ~ 午後 5:15

場 所：東大薬学部記念講堂

演者ならびに講演タイトル：

- 血管内皮細胞の機能 — 総論 — 三井 洋司（微工研・動植物細胞）
- 血管内皮細胞の発生 中村 裕昭（埼玉医大・解剖）
- (仮) *In vitro* 血管モデルの LDL 透過性 藤原 敬己（循環器センター・循環形態）
- 血管内皮細胞障害と PGI_2 産生制御 室田 誠逸（東医歯大・顎口腔機能）
- (仮) *In vitro* における毛細血管形成と TNF の作用 佐藤 昇（防衛医大・生化）〔交渉中〕
- GAGs と FGFs の協調による内皮細胞の増殖制御 今村 亨（微工研・動植物細胞）
- (仮) 血球由来因子による内皮細胞の増殖制御

岡部 哲郎（東大・医）

世話人：三井洋司（微工研・動植物細胞）

加治和彦（都老人研・総合）

〔詳しくは、同封致しましたシンポジウムプログラムをご覧ください〕 （編集幹事，K. K.）

§ 決算報告と会計よりの申し送り

本学会の活動がますます活発となるのを拝見することは会員の一人として、まことに喜ばしいことである。大会ならびに学会誌「組織培養研究」の充実、図書の出版やフィルム編集などに加えて、国際細胞培養協会（IACC）の創立団体の一つとして、国際的な活動も始まっている。会員数も増加しつつあると聞いている。このような会の活動を支えている会計について係として一言申し送りたい。

会計収入についていえば、会費は勿論その核となるものであるけれども、その他の収入が会の活動に大きく貢献しているのが注目すべき傾向である。企業体その他の団体各位による賛助、「組織培養研究」誌の広告収入、出版物の印税に加えて、学会がその有意義な運用を託されている寄付金などがある。結果として、周知のような低額の会費で、この活発な会に参加することができる仕組みである。しかし、IACCへの加盟など、会員各位の会費を増額することによって負担すべき性格の支出も出てきている。やはり適正な会費を見積る時期に来ているのではなかろうか。

従来、会員からの御寄付はもとより、大会開催者からの大会会計の収支にもとづく御寄付、出版物の印税、広告収入など、いわば不定期な収入はすべて特別会計に入金してきた。このような特別会計の収入のなかには、学会誌の広告収入など、明らかに会の事業に投入すべき性格の収入項目がある。出版物の印税や大会開催者からの御寄付も本学会の事業に関連する収入である点で、純粋な御寄付と比較すると、事業活動に投入できる範囲が広いのではないかと感ずる。これらの収入の有効な用途について、会員各位の検討をいただければ幸いである。

旧年中、山根續会員より、決算書特別会計にあるような多額の御寄付を頂いた。この御寄付により、本学会の長年の懸案である奨学寄付金（或いは奨励賞）の創設に一步近づいた。これについても、山根續会員を始めとして寄付を寄せて頂いた各位の御好意に添うような用途を御検討頂きたい。

旧年度の決算書では、年度当初の予算（会員通信56号参照）と比較して約100万円規模が拡大している。これは、ほぼ正会員会費の前受分に対応している。支出では、組織培養研究4-2号が特集号であったため、当初の予算を上回る支出となった。また新年度分の大会援助金の支出を旧年度会計で済ませているため、帳簿上支出が増大している。この額を含めると約80万円を新年度に繰越したこととなり、予算での見積り（約110万円の繰越）と其れ程大きな違いはない。

旧年中は、高岡聡子、梅田誠両幹事が会計を実施し、引継の時点で帰国した松村が会計を締切った。決算書は黒田行昭、難波正義両会計監査委員の監査を経た。

〔文責 松村〕

昭和 60 年度決算収支表
(昭和60年 4 月 1 日 - 昭和61年 3 月31日)

一般会計

〔収入の部〕		〔支出の部〕	
勘定科目	決算額	勘定科目	決算額
正会員会費	2,438,000	組織培養研究 4 - 2 号発行費	1,825,200
賛助会員会費	930,000	会員通信発行費	158,300
入会金	43,000	会報会誌発送費 (会誌 4 - 1 含む)	392,040
雑収入 (バックナンバー収入)	130,500	大会補助金	800,000
		(1985 年度分並びに 1986 年度先払分)	
		業務委託費 (通信印刷費込み)	1,009,035
		名簿作製 (1986 年号)	485,400
		雑費	148,000
小 計	3,541,500	小 計	4,817,975
前年度繰越金	1,713,406	次年度繰越金	436,931
合 計	5,254,906	合 計	5,254,906

特別会計

〔収入の部〕		〔支出の部〕	
勘定科目	決算額	勘定科目	決算額
寄付金	5,000,000	ビデオ製作費 (送付込)	266,750
山根積会員より			
広告収入 組織培養研究 (組織培養研究 4 - 2 号分)	892,500		
出版物印税	411,255		
ビデオフィルム回収金	167,750		
利子収入	104,272		
小 計	6,575,777	小 計	266,750
前年度繰越金	2,928,034	次年度繰越金	9,237,061
合 計	9,503,811	合 計	9,503,811

昭和 61 年度予算
(昭和61年 4 月 1 日 - 昭和62年 3 月31日)

一般会計

〔収入の部〕		〔支出の部〕	
勘定科目	予算額	勘定科目	予算額
正会員会費	1,500,000	組織培養研究 5 - 2 号 (送料込)	1,200,000
賛助会員会費	900,000	会員通信発行, 発送費	410,000
入会金	40,000	業務委託費 (通信印刷費込)	940,000
特別会計より繰入金	950,000	フィルム作製費 (追加支出分)	200,000
		雑費	150,000
		I ACC 加盟分担金	250,000
		新規企画	400,000
小 計	3,390,000	小 計	3,550,000
前年度繰越金	436,931	次年度繰越金	276,931
合 計	3,826,931	合 計	3,826,931

特別会計

〔収入の部〕		〔支出の部〕	
勘定科目	予算額	勘定科目	予算額
寄付金 (1985 年大会剰余金 として佐藤会長より)	500,400	一般会計へ引渡金	950,000
寄付金 (合同酒精より)	119,058		
出版収益見込み	100,000		
フィルム収益見込み	100,000		
広告収入並びに利子収入	X		
小 計	819,458 + X	小 計	950,000
前年度繰越金	9,503,811	次年度繰越金	9,373,269 + X
合 計	10,323,269 + X	合 計	10,323,269 + X

§ 「組織培養研究」を担当して

金沢大・薬・放薬化 鈴木文男

2年前に高知で開催された第57回大会の幹事会。総会決定により、昭和59年と60年の2年間、学会機関誌「組織培養研究」の編集を担当することになった。幸か不幸かこの年から研究会開催が年2回から1回(春)に変更され、秋の号は従来のような研究会世話人まかせの抄録集でなく、学会事業の一環として編集委員の責任でもって発行しなければならない最初のものであった。言いかえれば、「組織培養研究」を本来の学会機関誌として発展させる絶好の機会に任かされたわけである。

しかし、編集発行にこぎつけるまで大変苦労した。まず第一に面食らったことは、その時の幹事会(あいにく出席できなかった)では「組織培養研究」を年2回発行することが決定されただけで、その内容、編成方法および将来的位置づけについて何ら方針が示されなかったことである。さらに発行に関する経費は編集委員が面倒見なければならないという条件つきであった。その年の夏は1カ月渡米することになっていたので編集方針を検討する余裕もなく、次のような暫定案で見切り発車することにした。つまり、編集関係の沖垣、常盤幹事と相談した結果、秋(第2号)は春の研究会のシンポジストおよびその企画者に講演内容を中心とした論文を書いてもらいそれを掲載する。さらに研究情報欄を設け、編集担当者や協力者(国際学会に出席した学会員など)によるトピックス紹介の記事を載せる。また、発行費については広告を募集し、その掲載費でまかなうという結論になった。

このようにして急きょ原稿依頼と広告募集を行い、どうにか第3巻第2号は完成した。広告ページのわりには薄いものになったが、内容的に極めて充実したものになったと自負している。しかし、学会員以外の研究者に執筆依頼する場合、原稿料を支払って礼をつくすべきであり、またこのように会員外のシンポジストに頼って発行したことに問題が残った。

暫定的にスタートしながら良い改革案が見つからず、翌60年の秋号も春の研究会のワークショップ演者による原稿でうめられた。今度は40名以上の執筆者、しかもほとんどが学会員という学会機関誌らしいものになった。しかしながら、しょせん春の研究会の焼きなましのため新鮮味に欠ける点は否めない。はたして多大の労力とお金を使って発行するほどの意義があるのか? 極めて疑問である。

組織培養技術そのものが研究課題となりえなくなった今日、勝田研究会として発展してきた十数年前とは学会の雰囲気は全く違ったものになっているという(会員通信第56号、高岡氏)。確かに今まで常連といわれた基礎研究者の姿が見られなくなった一方で、大学や各種研究機関、企業の研究所からの新入会員が増えている。これはバイオテクノロジーの一翼を荷なう学問分野として、組織培養学の発展が多くの人々から期待されていることによるものと思われる。しかし、今の学会運営に携わっている幹事に昔からの旧い人が多く、そういった新しい潮流に答えられない可能性がある。学会運営は会員の総意に基づいてなされ、その事業の一環として「組織培養研究」誌の発行を位置づけられるべきと考えます。これから日本組織培養学会をどのように発展さ

せるかを全員が考え、新しい学会運営方法について十分に討議された中で「組織培養研究」の編集方法が決定されることを期待します。

§ 第 59 回大会に出席して

浜松医大・病理学第一 内藤 恭久

第59回日本組織培養学会は去る7月13日(日)午後から15日(火)の2日間の日程で、予研の奥村秀夫先生のお世話のもとに東京の私学会館で行なわれました。演題数は特別講演をはじめワークショップ、一般口演を併せて59題、3会場に分かれての大会でした。年2回の学会が1回になり、研究分野の細分化の中で培養人口の増加にもかかわらず“十分な口演時間と十分な討議を”をモットーとする、どの学会にも望めないこのすばらしい創立者の明察に賛同しつつ実践し続けて来た本学会をもってしても今回の演題数を2日半で消化するのはかなりきつい日程だったのではないかと、世話人御一同の御腐心の程に深謝致したい気持でした。そして、この事実はまさしく本学会が本学会たり得るために解決しなくてはならない問題の現実と将来の姿でもあることを如実に実感しました。

私は都合で大会の2日目と最終日の2日間出席させていたゞきましたが、特に個人的な理由からワークショップは大変有意義でした。“無血清培養”および“線維芽細胞”シリーズでは、目的とする培養細胞が *in vitro* 本来の特性をあるいは特性であろうと考えられる特性をありのままに発揮できる培養手段としての無血清培養のもつ種々な問題点を披露していたゞけたし、私たち培養屋が本当に目的としている細胞を培養しているのだろうかということを線維芽細胞を題材に再提起させていたゞくように思いました。これも一重にすばらしい座長陣のリラックスした進行に負う所大のように思われました。大会2日目の特別講演では、人生の大部分を培養に捧げてこられた師の口をして尚“Cell culture is still art rather than science.”と言わしめた含蓄の深さは大会を飾るにふさわしい教訓として、私たち初学者の耳に響いたのではないかと思います。特別講演の余韻さめやらぬまゝに、“培養細胞に生体から離れてもなお培養という細胞にとって過酷な条件下で生体本来の機能や特性を発揮せよと問い、求め続ける以上、それに見合うだけの条件を細胞に与えてやるのが培養屋の仕事だよ”と言われた勝田先生の御言葉を改めて反響している次第です。そして、同時に本学会の使命は“培養技術を広く一般にひろめる”という創立当時の意図を、現在、本当に果し尽してしまったのだろうかと思いかえしつつ、学会場を後にしました。思いのまゝに綴ってしまった駄文と僭越の程を御海容いただき、今大会に出席した感想文とさせていただきます。

§ ちょっとひと言

理化学研究所 大野 忠 夫

先に行われた第59回日本組織培養学会総会で、本年秋に学会としてシンポジウム開催するとの決定が行われた。この件に関する幹事会の提案の仕方が唐突であったので、会員の一人としていささか疑問をもった。もはやこだわるものではないが、会員通信編集幹事からの要請に答えてここに再録してみたい。会員間の話のタネにしていなければ幸いである。

はじめに断っておくが、学会として会員に益する行事を企画し推進することに筆者はむやみに反対するものではない。筆者自身、学会名で出版されている専門書の編集に携わっている。今回の場合も、事前に十分に練り上げられた企画案があるシンポジウムともなれば、情報の質、量ともに豊かな会員交流の場となることが期待されるのである。しかしそれが、61年度予算案の支出の小さな一項目として大きな表に一行のっているだけであり、背景の説明抜きで予算案全体まとめて承認を求められたのでは、オヤッと思わざるを得ない。この学会は伝統的に年2回研究会を開催していたのを、3年前から年1回、春の大会に絞った経緯があるからである。

その時の理由は種々あったが、年2回も同じような会合があると内容が散漫になる、一般演題の数が十数題というのでは内容が淋しい、会員の旅費負担が大きい、一回の研究会の参加者数が会員数に比べて少ない、学会から世話人に援助できる費用が少ない、研究会の世話人のなり手がなかなか見つからない、学会ではなく研究会では世話人としても寄付金が集めにくい、等の点が筆者としては強く感じていたところであった。それを年1回の学術大会とし、秋の細胞生物学会（培養学会の同業者的色彩が濃い）と重ならないように春にもってきたことで、今日の大会の隆盛につながったと思っている。今後、シンポジウムとはいえ、結果として年2回の会合を開くことが慣行になれば、以前にあった問題点のいくつかが復活してしまうのではないかと懸念されるのである。

聞くところによれば、幹事会でも長時間の議論があったという。また、総会の時点では、本年中にシンポジウムを開催するのに世話人を含めて具体的な予定は未定ということであった。老婆心ながら、準備は間に合うのか、世話人を押しつけられて閉口してないか、学会援助の40万円が足りるのか、などと心配になってしまうのである。

§ 第37回米国組織培養学会に出席して

大分医大・内科第一 高木良三郎

今年の第37回米国組織培養学会は、6月4日から8日まで、Chicago Marriott Hotelで開催されました。最初の予告では6月11日から15日迄の会期となっていたのですが、ホテルの予約がすでに3年前から5日～8日迄となっており、business officeの手違いから日程が間違っ
て報ぜられた様で、私共は今年に入って会期が早まったのを知った次第です。そのせいもあつてか、参加者は750人と例年よりやゝ少なかったと聞いております。4日の夜は大ホールの展示会場においてreceptionが行われましたが、ここでAlton Jones Cell Science Centerに行つておられる屋さんや菅さんの元気なお姿に接することが出来ました。5日から学会ということになりましたが、Receptor biology "Protein phosphorylation and cell signalling"に関するSymposiumとSession in Depth, Roundtables, Contributed Papers, Poster Sessionが行われました。Symposiumには日本から三重医大の日高教授が演者として参加しておられました。組織培養学会はculture orientedであるべきであると思いますが、この様な分野の導入もこの2～3年積極的に試みられているようです。5日の午後7時半から行われたRound tablesの"Cells derived from pancreatic tissue"には、私も4人の演者の1人として参加し、また同行した浜口君もContributed Papersでの発表を無事に終りました。

今回の学会での印象を独断と偏見も含めて述べれば、やはり大方の関心はdifferentiation、それと関連して、serum-free medium, matrixといった処に集中していた様に思います。人の集りもこれらのテーマのsessionが一番多かった様でした。種々のgrowth factor及びこれを加えたserum-free cultureにおける細胞の増殖と共に、培養内で如何に分化機能を発現させるかという点であり、これをさらにつきつめていくとmolecular biologyに帰納することにもなるのだと思います。ところで、各sessionの発表演題をみますと、すばらしいと思われるものも勿論ありますが、技術的には日本で可成り以前に報告されているようなものもあり、玉石混淆とまではいわずとも、その様な感がしないではありませんでした。培地に関するAlter Jones groupの研究は立派であり、いろいろと教えられるところがありました。全般的にみて、個々の能力、技術は日本も変らないと思いますが、1つのprojectを決めた時、これを促進する協力態勢、エネルギー、馬力、研究費には違いがあるように、大学に居る私の眼には映りました。それと、毎度感ずることながら、学会における活発でも自由な発言、国民性の違いといえはそれまでとしても、我が組織培養学会でもこのような雰囲気は大切にしたいものだと思います。

7日の正午からbusiness meetingが行われ、私も出席するように云われました。ここでDr. G. Satoが次期presidentのDr. George Martin (Univ. of British Columbia, Dept. of Path.)と交代することになり、President electはDr. Robert E. Stevenson、Vice presidentはDr. Nellie Auersberg、SecretaryはDr. Warren I. Schaefferと投票の結果が報告されました。予定の報告が終り、最後にその他の報告事項となり、Dr. Hamが指名されてIACC (International Association of Cell Culture)に関する経過報告が

行われました。この発足は昨秋の日本における ICCC の際に、すでに大体決っていた様ですが、米国の組織培養学会で executive board members の承認はえていたものの、council board members の承認をえておらず、今回の学会でその承認をえていよいよ発足の段階になった訳です。会費は 1 人あたり年間 \$ 2.00 と云う事が報告されました。Dr. Waymouth から IACC の発足が、どの様な意義を有するのかと云う質問がありましたが、これに対し Dr. Ham から今後国際間における技術、知識の交流が極めて大切であることを、昨年訪日された際の日本の培養関係の研究の実情にも触れて説明がありました。最初の国際委員会は現在の処 9 月 22 日から 26 日 Pennsylvania 州 Hershey における米国組織培養学会の Decennial conference の際に行われる事が有力です。米国の委員は Dr. McGarrity, Dr. Ham と Dr. Hopps の 3 人と決定しました。

7 日の夕方は President's Suite に招待され、42 階の Dr. G. Sato の部屋の reception に参加しました。Dr. Sanford, Dr. Cailleau …… 1971 年の故勝田教授の我が国最初の International Conference に参加された面々も御元気で「あの時の Conference は本当によかった」と、未だにその当時の事が忘れられないらしく、一昔半以前の話がにぎわいました。

終って 10 日～14 日には私共の研究室から横川君が留学している Johns Hopkins 大の Prof. Tsó の研究室、中村君が留学している NIH の Prof. Notkins 研究室を訪れ、15 日～18 日には St. Louis の Washington Univ. の Prof. Lacy の研究室、19 日～21 日には Colorado 大学 Boulder の Prof. Ham の研究室に御邪魔してセミナーを行い、また研究意見の交換をさせて頂きました。さらに、22 日～24 日 Anaheim, Calif. の米国糖尿病学会では、St. Louis で合流した小野さんが発表を行い帰国した次第です。24 日間の可成りのハードなスケジュールでしたが無事消化することが出来たことを喜んでおります。Chicago は 5 日～7 日午前まで雨で、お蔭で(?)まじめに学会に出席しましたが、来年の米国組織培養学会は Washington D. C. で 5 月 27 日～31 日の間に行われる予定です。

日本の若い研究者がもっと積極的に米国の学会にも参加して情報の交換をはかれる事を希望して筆を擱く次第です。

§ 全員通信担当幹事をおりて

岡山大学 常盤孝義

2年余り会員通信の編集を担当して来ました。この7月、新幹事選出を以って任務を終了いたしました。企画、原稿収集、校正その他の編集活動を通じ、多くの先生方のご協力、ご援助を得ましたことを深く感謝いたします。

この2年間、会員通信は、二つの大きな関連国際学会を迎え、その案内を再度にわたりご報告いたしました。花岡、松谷先生には、これら国際会議の実務担当者として、企画、運営上の問題点など貴重な学会記録をご寄稿いただきました。その他、研究室だよりや、臨床領域における組織培養研究の現況などに関し、数々の玉稿をいただき、限られた紙面を飾ることができました。

会員通信が、会員相互の情報交換の場、誌上学会の場として、活潑に利用され今後ますます充実し発展することを期待するとともに、会員の皆様の、新編集委員に対する一層のご協力をお願いする次第です。

編集後記

新旧幹事交替後、最初の会員通信をお届けします。本号は、主にこれまでの学会運営における懸案事項を確認する意味で新旧幹事会、幹事会、総会各報告を詳しく取り上げ、またそれに関連しての投稿記事を掲載しました。その中で、いくつかの問題提起がありましたので皆様の忌憚のないご意見をお待ちしております。

次号では、紙上討論のテーマに、“学会誌「組織培養研究」の内容およびその予算”を扱う予定です。ご投稿をお願い致します。また、お気づきのように、この号より頁、発行回数を増やすことになり、十分な紙面を以って会員皆様の情報を載せられるようになりました。“学会ニュース”、“研究室紹介”、“求人案内”、“培養よもやま話”、“新刊紹介”、“新製品使いごち”、“譲ります&譲って下さい”、など奮って原稿をお寄せ下さい。

編集長は只今ドイツへ出張中で、次号には“ドイツ便り”が載ることでしょう。日本へ戻ると、61号の編集が待ちかまえていることを忘れていませんように。 (K. M.)

§ 新入会員

氏名	連絡先	氏名	連絡先
青木大輔	慶應義塾大学医学部産婦人科 〒160 新宿区信濃町 35 ☎03-353-1211	清宮健一	明治製菓(株)中央研究所産理安全性研 究所 〒222 横浜市港北区師岡町 760 ☎045-541-2521
秋葉隆三	国立東京第二病院産婦人科 〒152 目黒区東ヶ丘 2-5-1 ☎03-411-0111	久布白兼行	慶應義塾大学医学部産婦人科 〒160 新宿区信濃町 35 ☎03-353-1211
安部まゆみ	東京医科歯科大学医学部 〒113 文京区湯島 1-5-45 ☎03-813-6111	小池勝	北興化学開発研究所微生物化学研究 室 〒243 厚木市戸田 2165 ☎0462-28-5881
石渡男	石渡産婦人科病院 〒310 水戸市上水戸 1-4-21 ☎0292-21-2553	小島雅彦	足利赤十字病院 〒328 足利市本城 3-2100 ☎0284-21-0121
伊藤敏文	大阪大学医学部第一内科 〒553 大阪市福島区福島 1-1-50 ☎06-451-0051	斉藤光和	富山医科薬科大学第二外科 〒930-01富山市杉谷 2630 ☎0764-34-2281
猪俣素子	国立がんセンター研究所 〒104 中央区築地 5-1-1 ☎03-542-2511	酒依元子	国立東京第二病院 〒152 目黒区東ヶ丘 2-5-1 ☎03-411-0111
岩沢篤郎	昭和大学藤ヶ丘病院研究室 〒227 横浜市緑区藤ヶ丘 1-30 ☎045-971-1151	沢田石勝	富山医科薬科大学第二外科 〒930-01富山市杉谷 2630 ☎0764-34-2281
植田政嗣	大阪医科大学産婦人科 〒563 高槻市大学町 2-7 ☎0726-63-1221	清水恵一郎	東京慈恵会医科大学第一内科 〒105 港区西新橋 3-25-8 ☎03-433-1111
宇田川廣博	慶應義塾大学医学部産婦人科学教室 〒160 新宿区信濃町 35 ☎03-353-1211	真保俊	富山医科薬科大学第二外科 〒930-01富山市杉谷 2630 ☎0764-34-2281
太田博明	東京電力病院産婦人科 〒160 新宿区信濃町 9-2 ☎03-341-7121	筋野雨	東京慈恵会医科大学 〒105 港区西新橋 3-25-8 ☎03-433-1111
小川博	浜松医科大学病理学第一講座 〒431-31浜松市半田町 3900 ☎0534-35-2220	鈴木靖徳	明治乳業ヘルスサイエンス研究所細 胞生物学研究室 〒250 小田原市 成田 540 ☎0465-37-3661
小田切治世	富山医科薬科大学第二外科 〒930-01富山市杉谷 2630 ☎0764-34-2281	相馬雅行	(財)茨城県総合産科協会検査部二 課 〒310 水戸市笠原町字上組 489-5 ☎0292-41-0011
小野巖	国家公務員等共済組合連合会水府病 院検査科 〒310 水戸市大町 2-1-40 ☎0292-31-7648	高山泰子	慶應義塾大学医学部産婦人科学教室 〒160 新宿区信濃町 35 ☎03-353-1211
加藤博	富山医科薬科大学第二外科 〒930-01富山市杉谷 2630 ☎0764-34-2281	田子勝彦	(財)日本ポリオ研究所 〒189 東村山市久米川町 5-34-4 ☎0423-93-3191
鎌倉光宏	慶應義塾大学医学部 衛生学公衆衛 生学教室 〒160 新宿区信濃町 35 ☎03-353-1211	田沢賢次	富山医科薬科大学 〒930-01富山市杉谷 2630 ☎0764-34-2281
唐木芳昭	富山医科薬科大学第二外科 〒930-01富山市杉谷 2630 ☎0764-34-2281	田中裕之	昭和大学藤ヶ丘病院耳鼻咽喉科 〒227 横浜市緑区藤ヶ丘 1-30 ☎045-971-1151

氏名	連絡先	氏名	連絡先
田畑正司	川崎医科大学衛生学教室 〒701-01倉敷市松島 577 ☎0864-62-1111	町田治彦	ヤマサ醤油研究所生物第一研究室 〒288 鏡子市新生町 2-10-1 ☎0479-22-0095
塚崎克己	国立埼玉病院 〒351 和光市諏訪 2-1 ☎0484-62-1101	松浦知和	東京慈恵会医科大学第一内科 〒105 港区西新橋 3-25-8 ☎03-433-1111
徳光崇	ヤクルト本社中央研究所 〒188 国立市谷保 1798 ☎0425-75-8960	水野守道	北海道大学歯学部 〒060 札幌市北区北 13 条西 7 丁目 ☎011-716-2111
中川静紀	湧永製薬中央研究所生物研究部 〒729-64広島県高田郡甲田町下甲立 1624 ☎082645-2331	宮尾源二郎	昭和大学藤ヶ丘病院耳鼻咽喉科 〒227 横浜市緑区藤ヶ丘 1-30 ☎045-971-1151
中島豊	九州大学医学部第一病理 〒812 福岡市東区馬出 3-1-1 ☎092-641-1151	向井万起男	慶應義塾大学医学部病理学教室 〒160 新宿区信濃町 35 ☎03-353-1211
永森静志	東京慈恵会医科大学 〒105 港区西新橋 3-25-8 ☎03-433-1111	宗像周二	富山医科薬科大学 〒930-01富山市杉谷 2630 ☎0764-34-2281
成澤園子	慶應義塾大学医学部産婦人科婦人科 病理研究室 〒160 新宿区信濃町 35 ☎03-353-1211	牟礼洋	鹿児島大学医学部第一外科 〒890 鹿児島市宇宿町 1208-1 ☎
新谷稔	東京慈恵会医科大学第一内科 〒105 港区西新橋 3-19-18 ☎03-433-1111	安田恵子	京都大学医学部婦人科学産科学教室 〒606 京都市左京区聖護院川原町 54 ☎075-751-3269
西島和弘	川澄化学工業製品管理室 〒876-01大分県南海部郡弥生町大字 小田 1077 ☎09724-6-1212	矢野博久	久留米大学医学部第一病理学教室 〒830 久留米市旭町 67 ☎0942-35-3311
二宮孝文	札幌医科大学解剖学第一講座 〒060 札幌市中央区南 1 条西 17 丁目 ☎011-211-6111	山岡成章	昭和大学藤ヶ丘病院 〒227 横浜市緑区藤ヶ丘 1-30 ☎045-971-1151
野口隆博	大分医科大学内科第一 〒879-56大分県大分郡挾間町区大ヶ丘 1-1506 ☎0975-49-4411	山崎正志	千葉大学医学部整形外科学教室 〒280 千葉市京橋 1-8-1 ☎0472-22-7171
遠村哲	東京慈恵会医科大学第一内科学教室 〒105 港区西新橋 3-25-8 ☎03-433-1111	山田明	富山医科薬科大学第二外科 〒930-01富山市杉谷 2630 ☎0764-34-2281
長谷川伸彦	ヤクルト本社中央研究所 〒188 国立市谷保 1798 ☎0425-75-8960	山良良樹	㈱ユニテッドバイオテクノロジー 〒104 中央区湊 3-5-7 ☎03-551-2071
平田雅春	塩野義製薬研究所 〒553 大阪市福島区豊洲 5-12-4 ☎06-458-5881	吉田篤正	昭和大学藤ヶ丘病院耳鼻咽喉科 〒227 横浜市緑区藤ヶ丘 1-30 ☎045-971-1151
藤巻雅夫	富山医科薬科大学 〒930-01富山市杉谷 2630 ☎0764-34-2281	吉田進	湧永製薬中央研究所生物研究部 〒729-64広島県高田郡甲田町下甲立 1624 ☎082645-2331
本間定	東京慈恵会医科大学第一内科 〒105 港区西新橋 3-25-8 ☎03-433-1111		

〔賛助会員〕

氏名	連絡先	氏名	連絡先
東栄(株)営業部 田嶺竹	山 〒101 千代田区神田松永町 23 ☎03-253-7521	ボクスイブラウン (株)サイエンス部 池田慶一	〒104 中央区銀座 7-13-6 第二 丸高ビル ☎03-545-5720

§ 住所等変更

氏名	連絡先	氏名	連絡先
赤木 忠厚	岡山大学医学部第二病理学教室 〒700 岡山市鹿田町 2-5-1 ☎	西 富 保	(株)三菱化成安全科学研究所鹿島研究 所 〒314-02茨城県鹿島郡波崎町砂 山 14 ☎0479-46-2871
今村 博	〒871 中津市栄町 2-73 ☎0979-22-2887	林 富	東北大学医学部小児外科 〒980 仙台市星陵町 1-1 ☎0222-74-1111
大和田 寛	〒156 世田谷区桜上水 4-11-6 ☎03-329-3305	半田 佳彦	岡山大学医学部附属癌研施設病 理部門 〒700 岡山市鹿田町 2-5-1 ☎0862-23-7151
岡本 健次	岡本医院 〒879-73大分県大野郡犬飼町大字犬 飼 11 ☎	伴 貞幸	(財)放射線影響研究所遺伝学部 〒732 広島市南区比治山公園 5-2 ☎082-261-3131
小野 順子	大分医科大学第一内科 〒879-56大分県大分郡狭間町医大ヶ 丘 1 ☎0975-49-4411	福島 博	〒400 甲府市富士見 1-20-14 ☎0552-51-5220
加納 良男	〒671-02姫路市飾本町清住 416 ☎	藤井 靖久	山梨医科大学第二解剖学教室 〒409-38山梨県中巨摩郡玉穂町下河 東 1110 番 ☎
鍋木 健志	水産庁新潟漁業調整事務所 〒951 新潟市西大畑町 5191 番地 新潟地方合同庁舎 2F ☎	藤田 宜哉	〒655 神戸市垂水区星陵台 6-4-6 ☎
小林 雄一	(株)ケン・コーポレーション岐阜ラボ ラトリ 〒501-11岐阜市佐野字外野 ☎0562-35-7303	堀田 進	金沢医科大学熱帯医学研究所 〒920-02石川県河北郡内灘町 ☎0762-66-2211
菅原 野	(財)体質研究会 〒602 京都市上京区河原町通丸太 町下ル伊勢屋町 406 マツヨビル 4 ☎075-241-4054	守屋 宏子	〒520-02大津市堅田 2-1-3-82 ☎0775-73-5636
情野 一郎	山形大学医学部衛生学教室 〒990-23山形市蔵王蔵田西の前 ☎0236-33-1122	山口 啓輔	東国崎広域病院 内科 〒873-02大分県東国崎郡安岐町大字 下原 1338 ☎0975-49-4411
棚田 正三	メクト(株)中央研究所 〒359 所沢市北野 1780 ☎0423-48-1355	山田 進一	〒176 練馬区旭町 1-5-12 ☎03-977-9217
谷 莊吉	〒211 川崎市中原区木月 464 ☎	吉田 剛	〒223 横浜市港北区新羽町 338 新羽花椿寮 ☎045-541-2755
津島 知晴	鳥取市立病院泌尿器科 〒680 鳥取市翠町 71 ☎	吉本 純	岡山大学医学部泌尿器科 〒700 岡山市鹿田町 2-5-1 ☎
露波田 武男	〒270 松戸市常盤平 G-24-7 ☎0473-86-6784		

(賛助会員)

氏 名	連 絡 先	氏 名	連 絡 先
(株)オリンパス第二販売本部機器G 酒井平一	〒101 千代田区神田駿河台 3-4 ☎03-251-8981	住友ベークライト (株)医療機器開発本部 朝久野貞郎	〒100 千代田区内幸町 1-2-2 大坂ビル ☎03-591-9171
(株)光研社エンジンアリング	〒161 新宿区西落合 2-21-24 ☎03-350-3376	富士レビオ(株) 橋本和久	〒160 新宿区西新宿 2-7-1 第一生命ビル 12 F ☎03-348-0666
コスモ・バイオ(株) 横溝敬	〒105 港区芝浦 1-1-1 東芝ビル ☎	マイルス三共(株) 企画第二課	〒104 中央区銀座 1-9-7 大和本社ビル ☎03-567-5511
合同酒精(株)中央研究所 嶋村睦夫	〒271 松戸市上本郷字仲原 250 ☎0473-62-1158	わかもと製薬(株)生物化学研究部 横井川久己男	〒258 神奈川県足柄上郡大井町金手字南 378 ☎0465-63-3311